

国会議事堂の裏手に、12階建ての議員会館が3棟並ぶ。その中央の会館5階に、衆議院議員辻元清美さん(52)の事務室はある。本年度予算案の集中審議が続いていた10日、ソファやテーブルの上は議案資料が山積みになっていた。

## 「交通の憲法」

2001年の衆院予算委員会。「総理、総理、総理」と、当時の小泉純一郎首相に集団的自衛権をめぐり議論を挑み、全国に名をはせた辻元さん。甲高い関西弁を響かせ「批判の急先鋒」といったイメージが強い一方、「政治は成果を挙げてナンボ」と合意形成の最前線で奔走する。1年生議員だった1998年、議員立法でNPO法を成立させたときからそうだった。いま、脱原発や護憲に力を注ぐ辻元さんだが、ひそかに情熱を傾けるテーマが「交通の憲法」と位置付け

る交通基本法だ。超高齢化や環境問題、そして格差解消に対処するため、公共交通の充実を軸にした移動、社会参加の保障は政治の責務だと考えている。

「私にとって子どものような存在。何とか大きく育てたいんだよ」

辻元さんは2009年に発足した鳩山由紀夫内閣で、国土交通副大臣を務めた。日本航空の再生など難題が山積する中、交通基本法の制定に並ならぬ意欲を持って臨んだ。

国交省に入って、辻元さんがあらためて驚いたことがある。

交通にかかわる施策でも、部局ごとにバラバラに進める縦割り構造。空港や新幹線、高速道路が次々整備されても、地元住民にあまり利用されず、共倒れ状

# 社会変える「漢方薬」



社会を変える法律として交通基本法の制定に期待を寄せる辻元清美さん=10日、東京都千代田区

態となる地方都市の実情がそこに重なって見えた。そこから重なる見えてきた。

省内の連携を図るためにも、全部局が集まって交通基本法をつくるのが必要。そんな思いを強めた。

基本法制定に向けた関係者へのヒアリングでも、辻元さんと国交省の目線の違いは際立った。

国交省側が最初に示したリストには、業界団体の代表者がずらり。辻元さんはこれを差し戻し、障害者団体やNPOなど利用者側から意見や要望を積み上げていった。

られた。

それだけに「内容は賛成でも「政局で反対」という政治の現状に、苦虫をかむ

「基本法」の成立で、どんな社会を見据えるのか。

辻元さんは、男女共同参画社会基本法や環境基本法を例に挙げて解説する。

「基本法ができれば県や市町村も条例をつくる。国も予算を付けなくちゃ、となる。非常に重たいんですよ」

さらにNPO法とタフらせ、こう期待をにじませた。

「世の中がじわじわと変わっていく漢方薬型の法律。自分たちがまちづくりや公共交通を担っていくこう、という動きが広がれば日本は変わる」

超高齢社会の進展という時代状況を踏まえ、どんな制度や仕組みを作り上げていくべきなのか。政治や行政の役割、そして私たち市民一人一人の意識や行動が問われている。

(第5部終わり 交通とまちづくり取材班)